

はじめに

素材・文化・人をつなげてきた漆

漆は、ウルシの木のことですが、その樹液や、樹液をぬったおわんなどの道具のことをさすこともあります。ここで、「漆」の漢字を見てみてください。ふつう、樹木であれば木へんを使い、さんずいは水に関係するものを表すものです。また、右側のつくりを見ると、「木」の下に「水」があります。まさに、木からたれる樹液のことです。こうしたことから、ウルシにさんずいが使われているのは、それだけ昔から樹液が使われてきたからだと考えられます。

そして、現在までもずっと使われてきたのは、それだけ利用価値のあるものだからです。みなさんがよく目にする漆製品は、おわんやはしでしょう。木製品は水分によってくさりやすくなりますが、漆の膜で水分の浸透を抑え、漆の成分により抗菌防カビ効果が生まれます。こうした実用的な利点だけでなく、色を加えたり、金銀などの加飾をすることで芸術的な作品づくりにもおおいに期待される素材となります。漆は日常使いの道具にも、芸術作品にもなる素材なのです。

大量生産の時代になり、手間がかかり、高い技術が求められる漆製品は、高価で扱いがむずかしいと一時期避けられたこともありますが、それ以上に自然の産物としての希少性や、文化としての重要性が見直されて、今また国内外から注目を集めています。

この本では、種類や歴史、漆の技など、さまざまな角度から漆を紹介しています。知れば知るほど、日本文化の奥深さを感じ、漆のすばらしさがわかってくることでしょう。



▲「二月の内・弥生・養老」三代歌川豊国画
ひな祭りに、子ども用の湯めりのお膳でお祝いをしている様子です。豪華な全員の装束がほどこされています。

もくじ

漆の世界へようこそ・・・・・・4

- 漆って何だろう……………4
- 漆ぬりの技法いろいろ……………6
- 各地域の漆いろいろ……………8



漆のすご技を見てみよう・・・・・・12

- 漆かきのすご技……………12
- 輪島塗のすご技……………14
- 琉球漆器のすご技……………18



進化する漆文化・・・・・・20

漆ってこんなにすごい！・・・・・・22

らでん細工にチャレンジ！・・・・・・24



もっと漆を知ろう・・・・・・26

- 漆の歴史……………26
- 海外から注目された漆……………29
- 漆液の昔と今……………30
- 漆の技術をつなげるために……………30
- 漆に関わる仕事をするには……………31



漆ぬりの技法いろいろ

漆の一番の活躍どころは、やはり木製品の塗装で、「ぬりもの」にあります。漆ぬりには、表面全体をおおう「ぬり」と、ぬった後に装飾を加える「加飾」に別れます。おもにどんな技法があるのか見ていきましょう。

【ぬりの種類】

下地の層をつくらずに、木目など木材の美しさを生かしてめる技法と、下地の層をつくって強度を増した上にぬる技法があります。

下地の層をつくらぬ技法

ふき漆・すり漆

透明感の高い透き漆を木地表面にぬっては布や和紙でふきとる作業をくり返し、木目を生かして仕上げます。木材の質感を見た目からも感じられる特徴があります。



木地呂ぬり

半透明のあめ色の透き漆を、何度も重ねぬりし、木目を生かしながらも落ち着いた色に仕上げます。木の表面にある細かい穴などを下地でうめて、表面をなめらかにみがいてからぬる場合もあります。



下地の層の上に重ねぬりをする技法

無地・なめらかに仕上げる技法

ぬり立て

上ぬり用の漆をぬって、そのまま仕上げとするシンプルな技法で、ひかえめな光沢が特徴です。花ぬり、ぬりはなしともいいます。



呂色ぬり

上ぬりした表面をなめらかにみがき、さらに透明感の高い透き漆をぬり、みがいてつやを出します。蒔絵や沈金の加飾をする場合に多く使う技法です。



模様・質感を出す仕上げ

とぎ出し変わりぬり

複数の色の漆を重ねぬりなどしてから、表面をといで模様を出す技法。洋装などにも用いられます。



※漆工法では、表面をうすくけずり、凹凸をなめらかにしたり、下の層を出したりすることを「とぎ」といいます。

たたきぬり

漆に卵のからをくいだものや豆腐、おからなどをまぜてぬり、スポンジ状のもので表面をたたいて質感を出し、最後にローラーなどでならした、ざらつきのある仕上げのこです。



布目ぬり

耐久性を高めるための布を漆で貼りつけ、その布の質感を生かして布の上からうすく漆をぬって仕上げる技法です。デザイン的に使われることもあります。



漆ぬり作品の呼び方

漆をぬって仕上げた木工品のことを、「ぬりもの」と呼びます。この場合、器だけでなく、家具類もふくめます。手に取って扱うような小物のぬりものは「漆器」と呼びます。器と書きますが、はしなど器でないものもふくまれます。「漆工芸」と「漆芸」は同じ意味で、漆を使った工芸品とその技術全般をふくめます。「漆ぬり」も同様に、作品と技術両方の意味をふくめます。

また、品物の用途ごとに「ぬりわん」「ぬりぼし」などと畔んだり、漆ぬりの技法により「らでん雑工」などと表現したりすることもあります。日本では、漆ぬりを特別なものとして、他の木工品や竹編工と区別して呼ぶようになったのかもしれない。

【加飾の種類】

漆ぬりをデザイン性豊かにした加飾の種類を見てみましょう。このほかにもありますし、組み合わせて使われることもあります。



漆で模様をかき、そこに金銀粉や金銀箔を貼りつけてはなやかな模様を表現します。模様のパーツごとに金銀を貼りつける→乾かす→みがく、という作業をくり返す必要があります。



アワビ貝やヤコウ貝などの内側の光る部分をうすくはぎ、漆で貼りつけて模様を表現する技法です。さらに、段差を解消するために漆を何度もぬったりみがいたりして仕上げます。



上ぬり仕上げをしたその表面に彫刻刀などで点や線をほり、その溝に金銀粉や金銀箔をうめこみ、仕上げます。



細かくくだいたウズラの卵などのからを、漆で貼りつけ、らでんと同様に仕上げます。漆では表現しにくい「白色」を取り入れるひとつの方法です。



漆の層をけずり、ほり模様を表現します。2色以上の色を重ねることで、より模様をはっきり見せることもできます。中国で発展した堆錦・堆黒もこの技法の一種です。



漆を焼いて濃度を高め、顔料をまぜた堆金もちをうすくはぎして模様に切り取り、上ぬりした作品に貼って仕上げます。沖縄ならではの技法です。

各地域の漆いろいろ

日本各地の漆液の生産地と、伝統ある漆ぬりを紹介します。漆ぬりは、地域によりそれぞれの歴史や地理的な背景をもちながら、どんな特徴があるのか見ていきましょう。

漆液の生産地と各地の漆ぬり

国内で使っている漆液のうち、国産はわずか5%しかありません。それ以外はアジア地域から輸入しているのが現状です。その希少な国産漆を生産している都道府県名を、下の地図では赤色にしています。おおよその産出量割合は以下になります。
79%：岩手県 12%：茨城県 4%：栃木県 5%：その他の赤色の都道府県
各地の漆ぬりについては、南から番号をふり、それぞれ紹介しています。



① 沖縄県 琉球漆器

琉球王国の時代から中国との交易がさかん、中国文化の影響を受けて漆器がつくられるようになりました。沖縄の南国の気質が感じられる、大皿ではなやかな作風が特徴のひとつです。技法としては、黒や茶の上ぬりにきらめく貝を貼りつけたらでんや、沖縄独自の技法の堆錦などが目をひきます。正月や日盆のときなどに使う重箱や嶋籠などは実用性がありながら、見ごたえがあります。



▲6寸三段垂朱総柄色蒔、5.5寸銘々皿



▲6寸二段嶋籠黒梅

② 福岡県 籃胎漆器

籠とは竹かごのことで、「籠をはら(胎)も漆器」のことです。江戸時代末期に久留米藩が招いた漆ぬり職人が、地域でさかんにつくられていた竹かごを使った「久留米漆漆器」を考案したのがはじまりとされています。凹凸のある竹かごに、複数色の漆をぬり重ね、けずったりがいたりすることで、丈夫で美しい仕上がりになります。



▲籃胎漆器のおぼん

④ 和歌山県 紀州漆器

室町時代に、根来寺で日用品や仏具としてつくられた根来漆が起源とされています。豊臣秀吉が根来寺をせめたと、漆器をつくっていた僧侶たちが黒江地域に逃げのびたことから、紀州漆の保護のもと、日用品としてつくられるようになりました。シンプルで丈夫な漆器を多くつくっています。



▲紀州漆器のおぼん

⑥ 福井県 若狭塗

江戸時代初期に、小浜藩の漆ぬり職人が、美しい海底の様子をもとにデザインしてつくったのがはじまりといわれています。卵のからや貝がら、マツの葉、米のもみがらなど、自然の素材をちりばめて模様をつくるのが特徴のひとつです。



▲若狭塗のふた物

③ 山口県 大内塗

室町時代に山口で勢力をもった大内氏が、京文化にあこがれをもち、漆ぬりの職人を招いて漆器をつくられたことから始まり、中国や朝鮮への輸出品となっていました。大内氏がほろびると、大内塗も一度途絶えてしまいますが、大正時代に復活。とくに大内人形(ひな)が有名で、夫婦円満の象徴とされています。



▲大内人形

⑤ 京都府 京漆器

平安時代からつくられるようになり、室町時代に茶の湯の流行に合わせて栄えました。そのため、茶道具が多く、わび・さびの情緒を大切につくられていましたが、時代に合わせてはなやかなものや斬新なデザインなど、さまざまにつくられました。おもな特徴は、下地に米のりを使わず漆を多く使うため、木地がほかの漆器よりうすくつくられているけれども、かたく丈夫なつくりになっていることです。



▲京漆器「竹取物語時絵 煮物椀」

平安時代の物語「竹取物語」をモチーフにしたふたつきのおぼんです。外側はかぐや姫が見つかった竹林を黒漆で表現、ふたを裏返すと色とりどりの物語の絵が現れます。



▲京漆器「几帳時絵 眼箱」

平安時代に室内の障仕切りとしていた几帳をかたどった眼箱です。時絵やらでんなどの技法を用いながら、たれさがた着やひもが美しく表現されています。

漆のスゴ技を見てみよう

漆かきのスゴ技

国産漆はとも希少です。しかもその79%を岩手県で生産しています。なかでも主要産地・浄法寺で、大ベテランの工藤竹夫さんにウルシの木から漆をとる漆かきのスゴ技を教えてくださいました。



漆は、ウルシの木の血液のようなもの。1本の木からとれるのはたった200g！おわん5個をぬれる量だよ

ウルシの木の樹液は苦味があるとわかってしまので、手袋にアームカバーをつけて完全防備で行います。白いハットがあるのは、漆が飛び散ると目に気づきやすいようにするためです。

【殺しかきの1年】

「殺しかき」とは、約15年育てたウルシの木から、1年で樹液をとりきり、伐採する方法です。切り株を残しておき、その根っこから生えてくるウルシを育てていきます。

- 山入り**
梅雨入り前に、今年とるウルシの木を決めて、余分な枝を落としたり、下草を刈って健康な状態を保てるように管理します。成長途中の木も大切に管理します。
- 自立て**
梅雨入りのころ、根元から20cmほどの高さの幹の表面に数cmの斜めのキズをつけ、印（自立て目）とします。そこからたてに約36cm間隔、横へは上下をずらしながら幹の周囲に2〜4列ほどキズをつけていきます。木に刺激をあたえることで、樹液が出やすくなる効果があります。
- 辺かき**
前につけたキズを基準に、上（または下）に少し長めにキズをつけ、漆をとる作業です。漆をとるキズを辺と呼びます。キズをつけたら4日は時間をおいて木を休ませます。その間は別の木の漆かきをするのが基本の流れです。
- 裏目かき**
手のとどく高さの辺かきが終わると、自立て目の下と、一番上の辺の上の幹に半周キズをつけ、そこから上の部分の漆をとる裏目かきを行います。
- 止めかき**
木の幹にくるり1周するキズをつけて、樹液の流れを止めます。最後の1滴までとってきたウルシの木は、切りたおします。

【漆かきの技】

漆かきの技を見ていきましょう。何木もキズをつけることを想定して、キズのたての間隔は約36cmほど、横はずらしながら幹の太さに合わせて2〜4列キズをつけます。

1 かまずり



新しくキズをつける前に、皮取りカマで幹の表面の凹凸をげずります。ゴミが入らないようにするためと、均一な深さのキズをつけるための準備です。

2 キズをつける



前につけたキズの少し上（または下）を、漆カンナでげずり、必要に応じてたが目さし側で軽くキズをつけます。1株分、一気にけずっていきます。

キズの深さがポイント

キズは樹皮のあつさだけに、形成層といわれる樹皮をはがした部分にはキズをつけないようにします。深くキズをつけると木が出てきて木が弱ってしまうことがあるからです。下の写真のように、漆をとり終わった幹の樹皮をめくっても、内側にキズがありません。次の作業があるため、素早い動きで次々とキズをつけていくことも大切です。



3 漆をとる

先が細く曲がったヘラで、にじみ出た漆をかきとります。1滴をできるだけムダにしないように、手早くかきとり、ホオノキの皮でつくったタカッポという容器に集めていきます。



タカッポ ▶ヘラ

4 漆をためる



とれる量が少ない間は、どんぶりなどにためます。かけ台を容器にのせ、タカッポからゴングリでかき集めて容器に入れます。また、かけ台やゴングリについている漆もムダなくこすりとり、固まらないようにラップをかけて空気を遮断します。

漆の種類

●とった時期による種類
初漆（6月中旬〜7月中旬）…乾きが早いのが特徴。
盛漆（7月中旬〜9月中旬）…つやがあり、固まったときの透明度がよい最高品として、漆塗りの仕上げに使われます。
末漆（9月中旬〜10月）…ぬりに使用したとき、あつみが出る特徴があります。
裏白漆（10月〜11月）…ねばりが強く、おもに漆塗りの下地として使われます。

●とった後の状態による種類
荒味漆…ウルシの木から樹液をとったそのままの漆。
生漆…荒味漆から、ゴミをろ過してとりのぞいたもの。
くろめ漆…生漆をかきまぜて細かく均一にする「なやし」という作業をし、30%ほど水分を蒸発させる「くろめ」という加工をしたもの。光沢を出し、ねばり気を強めた漆。
透き漆…くろめ漆のうち、半透明の茶かっ色の漆で、白色漆や色漆などもふくめます。
黒漆…くろめ漆のうち、炭粉や酸性鉄などで着色した黒色の漆。

◀1年分たためた漆をおさめるためのたる。

輪島塗の スゴ技

手間をかけて丈夫で美しい漆器をつくる産地として有名な輪島塗は、おもに分業でつくられています。ここでは、4軒の職人の人たちに、輪島塗をつくる一部の工程を見せてもらいましょう。

【輪島塗ができるまで】

輪島塗は、できあがるまでに100以上の手数がかかるといわれています。ここではおもな4つの工程に分けて、おおよその流れを紹介しましょう。漆を使う工程は、1回ずつ塗前風呂に入れて半日~1日以上乾かす必要があるため、とても時間がかかります。

1 木地づくり



木材で形をつかった漆をぬる前の物を木地と呼びます。5~10年乾燥させた木材から、ひき物でつくるわん木地、箱や家具類の箱物木地、うすい板を輪状に丸める曲物木地、複雑な形をくり物で表現する朴木地がつけられます。

2 下地



木地固め~木地みがき

木地のつなぎ目や細かい亀裂部分をうすくぞぎ、こくぞ(生漆とケヤキの粉に少量の米のりを混ぜたもの)をうめこみ、表面をなめらかにします。全体をみがいてから、生漆を全体にしみこませて木地を固め、木地の吸水性をおさえます。

ぬる⇒乾かす⇒とく⇒ぬる
……と、何度もくりかえすよ!



布着せ

縁やつなぎ目、おわんの底など、割れやすい部分に布を漆で貼りつけて補強します。乾いたら、布の重なった部分を切り落としてから、木地と布の段差にぞう身(ケヤキを炭化させた粉に生漆と米のりを混ぜたもの)をぬって平らにし、表面をとぎます。

できあがり

下地づくり



輪島市でとれる珪藻土からつくられる「地の粉」を粒子の粗いものから細かいものへ、3段階に分けてぬり重ねていきます。このおかげで、輪島塗ならではのかたい漆膜を生み出せるのです。乾いたら、ざらつきのないつるりとした状態にとぎます。

4 加飾



さらに表面をみがき上げる呂色、漆でえがいた絵に金銀の粉をまきつける蒔絵、けずった部分に金銀の粉や箔をうめこむ沈金など、さまざまな装飾技法を加えて仕上げます。



▲蒔絵のカップ

3 上塗り



無地物はできあがり!

16 ページ

最上質の上塗り漆を、ハケで均一にぬり、塗前風呂に入れて乾かします。無地物の場合は仕上げになり、できあがりです。

中ぬり

純度が高く油分をふくまない中ぬり漆を全体にぬります。しっかり乾いてから、ゴミなどをカンナでけずり、砥石や墨でとぎます。これをもう一度くり返し、布でみがき上げます。

【輪島塗の5つの技を見てみよう】

下地の布着せと下地づくり、上ぬり、加飾の沈金と蒔絵の技を紹介しよう。

布着せ

丈夫さの
ヒミツはここに!



着せもの漆をつくる

木地固めから1週間ほど置いてから布着せをします。まず、米のりと生漆をへらでよくまぜ合わせて均一にして着せもの漆をつくります。



布に着せもの漆をつける

作業台に着せもの漆をへらでぬり、その上にうすく目が粗い寒冷紗という布を帯状に切ったものをシワにならないように並べ、さらに上から着せもの漆をぬります。



おわんの縁に布をまく

おわんを布の上にかまえ、布のはしをもち上げ、幅のまん中あたりをおわんの縁にあて、おわんを回転させながら、くるりと巻きつけます。強く引きすぎると内側が浮きやすくなり、弱すぎるとシワができるため、単純なようでも繊細な作業です。



おわんの内側に布を貼る

縁から上の布を、内側に貼りつけていきます。最後は指に少し水をつけて布の上をたたき、密着させていきます。おわんの場合は、内側の底にも円形の布を貼ります。

下地づくり

かたさは「地の粉」のおかげ!



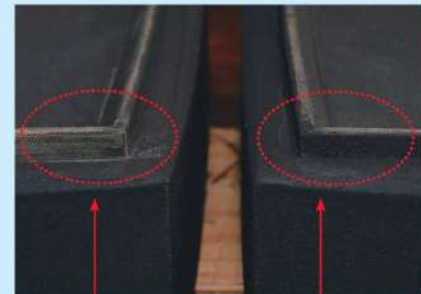
下地漆をつくる

生漆と米のり、地の粉をまぜ合わせてつくります。3回ぬりますが、一辺地の粉、二辺地の粉、三辺地の粉と、少しずつ粉の細かい地の粉を使い、密度の濃い層にしていきます。



下地漆をぬる

まず、一辺地の粉の下地漆をぬります。へらで均一になるように、こくろすくぬり、糸分な部分はとぎおとします。



そう身が見える
下地漆をぬる前

一辺地の粉の
下地漆をぬった状態

箱もの外側の底の部分の、立ち上がった部分をぬりました。左はぬる前で、そう身のあとが見えていますが、右側は地の粉入りの漆で黒くぬられています。

※地の粉は、輪島市でとれる珪藻土(ガラスのもとになる)をおがくずといっしょにオープンで蒸し焼きにし、くだいたもので、輪島塗ならではの下地素材。一辺、二辺などと頭につくのは、ぬる回数に合わせた地の粉の細かさです。